

植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグ — 写真であそぶ

会期：2013年11月23日（土・祝）～2014年1月26日（日）

会場：東京都写真美術館 3階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／朝日新聞社

特別協力：ジャック・アンリ・ラルティエグ財団

協賛：東京都写真美術館支援会員 後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本



左) 植田正治 シリーズ「綴り方・私の家族」より パパとママと子どもたち(I) 1949年 右) ジャック・アンリ・ラルティエグ
ビビとマミー、オンフルール、1922年6月 Photographie J H Lartigue ©Ministère de la Culture - France / AAJHL

企画概要

生涯アマチュア精神を貫き、撮ることを純粋に楽しんだ植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグ。彼らの作品は、日本とフランスという文化の違いを超えて、「人間にとって写真とはいったいどんなものであるか」を私たちに問いかけています。

本展は、二人の偉大な写真家の業績を堪能するだけでなく、それぞれの作品が、カメラの機械性を生かした近代写真表現の成熟期において、いかに独特であったか、そして時代性を捉えていたかを問う初めての試みです。日本とフランスという文化の違いを超えた共通性と二人の独自性が同時に見えてくるはずです。フランスのジャック・アンリ・ラルティエグ財団との共同企画により、ラルティエグが没後フランスに遺した豊富なコレクションと、東京都写真美術館が重点的に収集した植田のコレクションから選りすぐった176点を紹介します。

本展はジャック・アンリ・ラルティエグ財団と東京都写真美術館の共同で企画されました。This exhibition is co-curated by the Donation Jacques Henri Lartigue and the Tokyo Metropolitan Museum of Photography.

出品作品

総出品点数：176 点

■植田正治作品

主に東京都写真美術館の収蔵作品より、1930～50 年代の代表作や、鳥取砂丘を舞台にした作品、シリーズ《童暦》《小さい伝記》《風景の光景》《音のない記憶》など 88 点 を出品します。

■ジャック・アンリ・ラルティエグ作品

ジャック・アンリ・ラルティエグ財団（フランス・パリ郊外）収蔵作品より 80 点、東京都写真美術館収蔵作品より 8 点の計 88 点 を出品します。



上) 植田正治 後ろ向きの少女
1949 年

左) シャモニー、1918 年 1 月 8 日

右) ジャック・アンリ・ラルティエグ「アンナ・ラ・ブラドヴィナ」と呼ばれたアルレット・プレヴォ、連れている犬はシシとゴゴ、ブローニュの森の大通り、パリ、1911 年 左右とも Photographie J H Lartigue ©Ministère de la Culture - France / AAJHL

作家略歴

植田正治（1913—2000）

鳥取県西伯郡境町（現・境港市）に生まれる。中学時代に写真に興味を持ち、カメラを入手。32 年、写真を本格的に学ぶため上京、オリエンタル写真学校に通い、帰郷後、営業写真館を開業。傍ら『アサヒカメラ』『写真サロン』等の月例コンテストで入選を重ね、モダンな造形表現で注目される。一貫して故郷の山陰地方で撮影を続け、特に鳥取砂丘を舞台に家族らをモデルにした演出写真は、植田のユニークな世界を生み出している。



植田正治 風船を持った自画像 (II) 1948 年頃

ジャック・アンリ・ラルティエグ（1894—1986）

1894 年フランス、パリ郊外のクールブヴォア生まれ。裕福な家庭に育ち、子どもの頃から父親に買い与えられたカメラに親しむ。1915-16 年、アカデミー・ジュリアンで絵画を学び、画家として活動。一方で趣味として、家族や友人たちとの日常生活やスポーツ競技のスナップショットを撮影し、アルバムにまとめた。1963 年、ニューヨーク近代美術館での個展がきっかけとなり偉大なアマチュア写真家として世界的に評価される。



ぼくの空中プロペラ式水中翼船、板の上に取り付けた「ゴモン・ブロックノート」カメラを使ってお風呂の中で撮った写真、シャッターはママが切った、コルタンパール通り 40 番地、パリ、1904 年 Photographie J H Lartigue ©Ministère de la Culture - France / AAJHL ※少年はラルティエグ本人

展覧会担当者に聞く
～植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグ～
その違いと共通点

植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグの作品は、純粹で、自由で、そして見る者の心を捉えて放さない不思議な力を放っています。美しく構成された作風にはどこか共通点があるように感じられる一方で、全く違う作品制作の背景があります。そんな二人の作家の魅力を、展覧会企画者である鈴木佳子、金子隆一の両学芸員に聞いてみました。（東京都写真美術館広報誌「eyes79号」より）

植田正治がラルティエグ作品の大ファンだったことが、今回の二人展が実現するきっかけになったそうですね。植田が憧れたラルティエグとはどんな写真家だったのですか？

鈴木「ラルティエグは1894年、フランスでも屈指の財閥の家系に生まれています。70歳を目前にした1963年に、ニューヨーク近代美術館で個展が開催されて初めて名が世に出るわけですが、それまで写真家としては全く知られていませんでした。繊細な性格だったようで、こどもの頃、大好きなママ、尊敬するパパ、強いお兄さん、仲の良い従兄弟たちと過ごす毎日がとても幸せで、その一瞬一瞬が失われていくことが耐えられずに、思い悩んでしまった。このままではいけないと父親がカメラを買い与えたことが、写真を始めるきっかけになったそうです。その頃から**幸せな出来事を一つももらすまいと、生涯を通して日々写真を撮り、日記やアルバムにまとめていく**わけです」

では、写真で作品を作っているという意識はなかったのですね。

鈴木「ラルティエグはインタビューでも、有名な写真家の名前をほとんど知らないと答えています。写真はあくまでも、自分の楽しみのためだけに撮っていたんですね。その彼のアルバムを見ていくと、別荘でプールに入ったりテニスをしたり、映画スターやスポーツ選手との華やかな交流も出てきたりと、まるでおとぎ話のような人生が続きますが、他の登場人物たちと一緒に写る本人はとても静かな表情で、強烈さがない。実際には苦悩を抱えてもいたし、晩年にいたるまで落ち着いた気持ちになることが難しかったと、関係者には漏らしたこともあったそうです」

植田正治のほうがアマチュアということにより意識的だったのでしょうか。

金子「彼は、“生涯アマチュア写真家”“アマチュア精神”という言葉に非常にこだわっていました。60年代末から70年代はじめに、商業や広告、報道を目的とはせず純粹に写真表現を行う写真家を“シリアス・フォトグラファー”と呼ぶ言い方が出てくるんですが、植田正治はそれに対応する考え方として“アマチュア”という言葉が頻繁に使うようになります。**職業写真家ではないからこそ、自由な表現が可能なんだ**という意味も含まれているのかもしれない。彼はそんなふうにして、自分の写真家としての生き方を位置づけようとしたんですね」

鈴木「植田はその当時、雑誌『カメラ毎日』の山岸章二編集長と懇意にしていたそうですが、その山岸編集長のところに夜中でも電話をかけて、新しい写真について意見を聞きたいと言って、何時間でも話しをしていたそうです。家族にだって都合はあるだろうし、こどもたちも遊びに連れて行ってほしい気持ちもあったかもしれませんが、そんなことはおかまいなしに、鳥取砂丘に連れて行っては、ポーズを撮らせて、納得のいくまで撮影を続けたわけですね」



植田正治 猿のマスクをかぶった自画像
1975年

金子「ラルティエグの写真は、いわゆる家族アルバムの写真と言えます。一方、植田正治の娘のカコさんは、うちには家族写真がないんですよとおっしゃっていた。みんな作品なんです、と。**ラルティエグと植田正治は同じアマチュアでも、写真の成り立ち方が全然違うんですね。**植田正治は、そうやって写真で作品をつくるのが日常でしたが、かたやラルティエグは日常が写真になっていった」

鈴木「そして、**対極ではありながらも、どちらも非常に好奇心旺盛で、写真の新しい表現を追求することにほどん欲でした。**ラルティエグは、1900 年前後、写真撮影で面白いのは瞬間を撮ることだと、とても早い段階で悟って、それを実現させようと様々な試みをしていくんです。技術的にはシャッタースピードが今よりもずっと長く時間がかかっていた時代です。乳母にボールを投げさせて撮った作品（「ぼくの乳母デュデュ、パリ」1904年）は、まだ少年時代のもので、これは最初期に彼が撮った、瞬間的な表現を試みた写真のひとつです。さらにラルティエグの写真はすごくスピードが感じられるものが多い。家族で自動車レースを見に行くとか、兄が飛行機に乗ることを趣味としていたこともあって、ラルティエグはそれらを撮ることに熱中して、独自にテクニックを身につけていきました。写真史を知らないと言いながらも、写真の動向を先取りして、優れた作品を数多く制作しているんです」



飛行機「XYZ24 号」の離陸、ビルー、ジュー、ジョルジュ、ルイ、デデそれにロベールが飛ぼうとしている、ルーザ、1910年9月 Photographie J H Lartigue ©Ministère de la Culture - France / AAJHL

植田正治は、あらかじめ演出してから撮影した作品が印象的です。

金子「植田正治の写真は人間を撮っていても、人として撮るんじゃなくてオブジェとして撮っているとよく言われます。砂丘のシリーズはまさにその典型ですね。**彼は、写真の中に自分の生活すべてをはめ込んでいった。だから家族はオブジェのように見えるんじゃないか**と思います。また、アマチュア写真家として、生涯、故郷の山陰地方に生きることにこだわっていました」

自由に写真制作に没頭していたからこそ、それぞれの生き方が、作品にも反映されているのですね。では、二人の作品に共通する魅力とは何でしょうか？

金子「ラルティエグと植田正治の作品は、こどもでも分かる写真だと思います。写真は記録道具ではありますが、彼らにとっては遊び道具であり、写真を撮ることが遊びとしてあった。つまり、こどもが撮るように、純粋で自由な気持ちで写真にむかっていたんです。だから、こどもの心を持たずに見ると、面白さが半減してしまうかもしれないですね。内容に理由をもとめたら魅力が分からなくなってしまう」

今回の二人展は、見る側の純粹さが試される展覧会ということになりますか（笑）。

金子「この展覧会がどれだけ楽しめるかは、どれだけ自分の心が自由であるかにかかっていると（笑）。これは冗談だとしても、とにかくこの二人の作品は理屈ぬきに楽しい写真が多いので、美術館だからといった気構えや難しいうんちくは抜きにして、気楽に楽しんでいただけたら企画者としてこれ以上の幸せはありません」

「写真に関する自分の“ゆるぎなき師匠”はジャック・アンリ・ラルティエグである」

「写真家が画像の中に多少とも介入しているのだということを皆に感じ取ってほしいと思います」

植田正治、パトリック・デュヴェルの仏雑誌のためのインタビュー収録による 1993年〔本人80歳〕



植田正治 小狐登場 1948年

「ぼくの写真は風も音も写し取ることはいないだろうし、地上に急降下していく時に“げらげら笑いたくなる”感覚をとらえることもないだろうことは分かっている。でも、後で写真を見たら、ぼくはみんな思い出せるだろう」

ジャック・アンリ・ラルティエグ、日記1916年11月1日〔本人22歳〕



ジャック・アンリ・ラルティエグ
ブットに柔術を教えるリコ、ルーザ、1910年8月 Photographie
J H Lartigue ©Ministère de la
Culture - France / AAJHL

逃げてゆく時間、確実にやって来る死、物体を必ず落下させる重力の法則、及び凶暴な自然の力といった、人の領域を超えたものの前では人間は無力である。ラルティエグはこのことを早くから見抜いていたし、自分を含めた人間の脆さについても鋭く意識していた。だが奇妙なことに、それだからこそ彼は不可能なことに決然と立ち向かう不屈の闘士になった。

マルティエヌ・ダスティエ（ジャック・アンリ・ラルティエグ財団ディレクター）本展図録より抜粋

関連イベント

■ゲストと担当学芸員よる対談

日時：11月23日(土・祝) 15:00~17:00

場所：1階アトリエ 定員：70名

出演：マルティーンヌ・ダスティエ (ジャック・アンリ・ラルティエグ財団、本展共同企画者)

金子 隆一 (東京都写真美術館専門調査員、本展企画担当)

司会：鈴木 佳子 (東京都写真美術館学芸員、本展企画担当)

※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

※当日10:00より当館1階受付にて整理券を配布いたします。[番号順入場、自由席]

■担当学芸員によるフロアレクチャー

会期中の第1・3金曜日16:00より担当学芸員による展示解説を行います。

(なお2014年1月3日11:30/16:00の2回のフロアレクチャーを開催します)

関連出版物のご案内

本展の開催に合わせて、全出品作品図版と、共同企画者および当館学芸員によるテキストを掲載したカタログを出版いたします。

発行：東京都写真美術館 価格：2,600円(税込)

開催概要

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/朝日新聞社

特別協力：ジャック・アンリ・ラルティエグ財団

協賛：東京都写真美術館支援会員

後援：在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本

会期：2013年11月23日(土・祝)~2014年1月26日(日)

会場：東京都写真美術館 3階展示室

観覧料：一般700(560)円/学生600(480)円/中高生・65歳以上500(400)円

*()は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員

*小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 *第3水曜日は65歳以上無料

開館時間：10:00~18:00(木・金は20:00まで) ただし2014年1月2日・3日は11:00~18:00

入場は開館の30分前まで

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は翌火曜日休館、12月29日~2014年1月1日)

お問い合わせ

東京都写真美術館 事業企画課

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 電話03-3280-0034

展覧会担当 鈴木 佳子 y.suzuki@syabi.com

金子 隆一 r.kaneko@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

Ueda Shoji & Jacques Henri Lartigue

Tokyo Metropolitan Museum of Photography 3F Gallery
Saturday, November 23, 2013 to Sunday, January 26, 2014.

This exhibition is organized by the Tokyo Metropolitan Museum of Photography and the Asahi Shimbun-sha in special collaboration with Donation Jacques Henri Lartigue.

Supported by: Friends of the Tokyo Metropolitan Museum of Photography

Under the auspices of : Embassy of France/Institut français du Japon

Ueda and Lartigue shared a lifelong delight in the essence of amateur photography, the sheer joy of taking photographs. Their works transcend differences between Japanese and French culture and pose the same question: What, after all is the human significance of photography?

This exhibition is more than a retrospective devoted to the work of two photographers who became giants in their field. It offers a glimpse of the period when modern photography was reaching maturity. It allows us to examine the works of these two great photographers, both individually and in relation to each other, asking how each is unique and yet representative of the times in which it was taken.

This exhibition is a joint production of the Tokyo Metropolitan Museum of Photography and Donation Jacques Henri Lartigue in France and combines works from the collection that Lartigue donated to the nation of France with works by Shoji Ueda from our own collection.

This exhibition is organized by the Tokyo Metropolitan Museum of Photography and the Asahi Shimbun-sha in special collaboration with Donation Jacques Henri Lartigue.

Photographer Biographies

Shoji Ueda (1913-2000)

Ueda was born in Sakai (now Sakaiminato) in Tottori Prefecture. He acquired his interest in photography along with his first camera while a student in middle school. In 1932, he moved to Tokyo to study photography seriously. After studying at the Oriental Photography School, he returned home and opened his own studio. His photographs were repeatedly selected in monthly contests for publication in Asahi Camera and Shashin Salon and attracted attention for their modern style of composition. A constant in his work is the landscape of his home prefecture, especially the Tottori dunes, where he used members of his family as models to create a unique visual world of his own.

Jacques Henri Lartigue (1894-1986)

Lartigue was born in Courbevoie on the outskirts of Paris in 1894. Brought up in a wealthy family, he fell in love with the camera his father bought for him when he was only seven. From 1915 to 1916, he studied painting at the Academie Julian and became active as a painter. As a hobby, he also began to take snapshots of the everyday lives of his family and friends and compile them in albums. His 1963 solo exhibition at the Metropolitan Museum of Modern Art in New York established his reputation as the world's preeminent amateur photographer.

This exhibition is co-curated by the Donation Jacques Henri Lartigue and the Tokyo Metropolitan Museum of Photography

For additional information, contact

Tokyo Metropolitan Museum of Photography

Tel. 03-3280-0099 www.syabi.com

Exhibition curators:	Suzuki Yoshiko	y.suzuki@syabi.com
	Kaneko Ryuichi	r.kaneko@syabi.com
Public relations:	Kushiro Akiko	a.kushiro@syabi.com
	Hirasawa Ayano	a.hirasawa@syabi.com
	Maehara Takako	t.maehara@syabi.com